



先進校に学ぶキャリア教育の実践

「おもろい」を起点に越境と対話をつくり 予測困難な社会を生きる力を育む

大阪偕星学園高校(大阪・私立)

予測困難な社会を面白がって生きる“生きおもろい”人の育成を目指す大阪偕星学園高校。
学校の枠組みを越えて対話を重ねるキャリア教育のプログラムを次々と導入し、
生徒の人生や将来に対する前向きな思いを育んでいます。

こんな学校は必読！

- ✓ 生徒の自己肯定感を高めたい
- ✓ 偶然の出会いから生徒の興味関心を広げたい
- ✓ 社会との関わりを充実させたい

取材・文／藤崎雅子

“生きおもろい”を掲げた 学校改革を推進

大阪偕星学園高校は今、「生きおもろい」人をふやすことを掲げて学校改革を推進している。「生きおもろい」とは、予測困難な現代社会をただ不安に思うのではなく、「おもろいやん」と前向きに生きていくこと。同校が大切にしている「おもろい」は、単なる「面白い」とは異なる。教頭の馳川祐子先生はこう話す。

「『おもろい』には独特の味わい深さ、温かみのある眼差し、そしてユーモアがあります。例えば、うまくいかないことがあっても『それおもろいやん』と言って、しみじみしながらも、からっとした気持ちで受け止めたり。また、自分と異なる個性の人の世界観も『それはそれでおもろいな』と認められたり。そんな『おもろい』を大切に、生きおもろい人を育てていきたいと考えています」

そのための教育方針として、生徒が笑顔になり熱量が上がる機会・瞬間の「おもろい」支援、人間としての器や認知を広げる「みになる」支援、キャリア観形成と進路目標達成の「みちになる」支援を重視(図1)。具体的には、講義型からプロジェクト型授業への転換、探究の授業におけるSEL(Social Emotional Learning)や演劇の手法を取り入れたコミュニケーション教育の実施、生徒主体で校則を見直すルールメイキング活動の導入などを進めている。

その一環として立ち上げたのが、「生き

かたゼミ」「キャリアアフェス」「おもゼミ」という3つのキャリア教育プログラムだ。かつての同校の生徒からは「どうせ自分なんて」「うちら偕星やから…」と自虐的な発言がよく聞かれていた。そんな生徒たちが自分の人生に対する肯定感を高め、学ばざることを「おもろい」と感じてエンジンが駆動するまでのステップを描き、対話と越境体験を重視してプログラムを設計した(図2)。2025年度より、学校法人本部のバックアップの下、学校と社会の橋渡しを担う業務委託スタッフと、現場の教員が連携して実施している。

3年間で30人の 輝く大人に出会う

3つのキャリア教育プログラムを順に見ていこう。まず、「生きかたゼミ」は、3年間で30人の輝く大人に出会うことをコンセプトとする社会人講演会だ。

大きな特徴はゲストの人選だ。担当する業務委託スタッフの細川凌平さんは講師依頼時、「輝かしい実績より、生徒たちが抱える悩みや痛みと似た課題を乗り越えて輝いていることを重視している」という。これまでのゲストは、数回の方向転換の末に起業した人、挫折後に海外放浪が転機となったサッカークラブ代表、自身の吃音症に気づいて同じ悩みをもつ人を勇気づけようと活動するミュージシャン、絶望の経験が今の幸せにつながっているというトランスジェンダーの男性俳優など多彩だ。自身のリアルな経験を踏まえて、自分の人生は自分で選べることや、



School Data

1929年設立／普通科
生徒数1,219人(男子733人・女子486人)
進路状況(2026年3月卒業生)
大学165人・短大6人・専門学校等51人・
就職19人・その他21人

Outline

パーパスは「“生きおもしろい”人をふやす。」。プロジェクト型授業、SELや演劇を取り入れた探究プログラム、多様な大人の生き方や学問・仕事に出会うキャリア教育、生徒主体のルールメイキングや学校行事に重点を置く。特進・文理進学・進路探究・スポーツの4コースを設置。令和6年度高等学校DX加速化推進事業(DXハイスクール)指定校。



教育支援スタッフ
細川 凌平さん



進路部
牧井 美帆先生

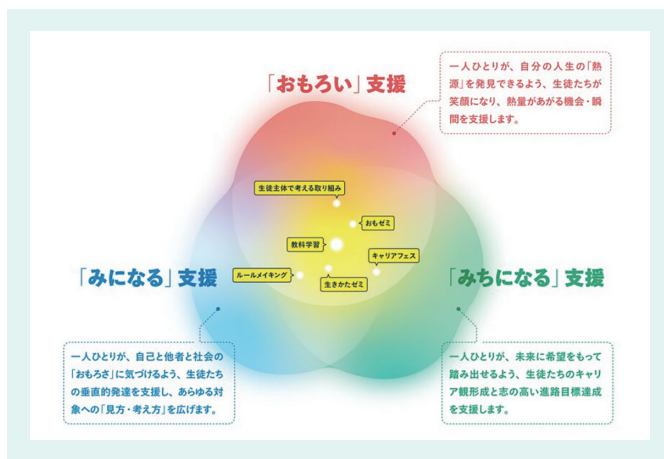


教務部
しらす 白須 晴信先生



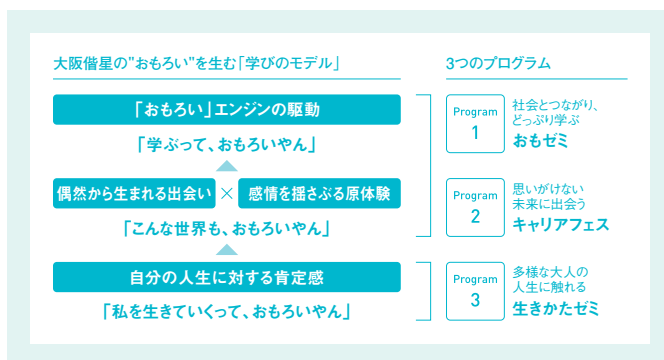
教頭
はせがわ 馳川 祐子先生

図1 大阪偕星学園高校の教育方針



熱中することの意味、今この瞬間の自分の時間の大切さなどが語られてきた。
「高校時代はうまくいかなかったも今は輝いている大人の話を聞いて、生徒には今の自分を肯定し、愛せるようになってほしい。講師の方とは事前に打ち合わせを行い、最後に『あなたが今夢中になっていることは何ですか?』といった問いを一つ投げかけることをお願いしています。生徒には講演後もその問いをもちながら、自分自身について考え続けてほしいと思っています」(細川さん)
講演中、生徒は熱心に耳を傾け、終了後は積極的に手を挙げて「良い人生とは?」「どんな社会になってほしいか?」などと質問するという。

図2 「学びのモデル」と3つのプログラム



「最初は『大人の話なんてきれいごとだ』と思っていた生徒も、等身大の大人に触れ、『大人も最初から完璧じゃなかったんだと安心した』『このままの自分で生きていてもいいと思えた』など、前向きに受け止めている様子です」(細川さん)
多彩な仕事・学問を体験し 将来に前向きになるきっかけに
2つ目のキャリア教育プログラムは、1学年対象に5月・12月の2回開催する「キャリアフェス」だ。大学や専門学校、企業等が多様なブースを出展し、生徒が学びや仕事を体験する、祭り(フェス)のような学校行事となっている。
以前も、大学や専門学校等の協力を得

て、資料配付と学問分野の説明を行う形式の「進学説明会」は実施していた。それを生徒たちがもっとわくわくできる「おもしろい」内容にしようと、体験重視のキャリアフェスにリニューアルした。今年5月の開催では「心理テストで自分の特性を知ろう」「生成AIで体感ゲームを作ろう」「赤ちゃんの抱き方・おむつ交換体験」など、40以上の体験ブースが開かれた。
「とりあえず高校に進学したもの、やりたいことがなく進路選択にも前向きになれない、自分に自信がなく夢をもてない生徒もたくさんいます。その状態で『将来を考えなさい』と言われても、なかなか難しいものです。5月開催ではまず、学問や仕事に関連することを、五感を使って体験し、『おもしろかった』と感ずること、で、『進路について考えてみるのも悪くない』という状態もついていたら成功です」(進路部・牧井美帆先生)
「キャリアフェス」のコンセプトは「思いがけない未来に出会う」だ。「実際に触れてみたら思っていたのと違ったという、新しい出会いを大切にしている」と牧井先生。どんなブースがあるかは、あえて事前告知していない。当日、「さあ行ってみよう」という教員の呼びかけで生徒が一斉に動き出し、直感で気になるブースに飛び込む。迷っている生徒や動きが鈍い生徒には、教員が「これどう?」「あっちも面白そうだよ」と声を掛けて背中を押す。約20分の体験を、ブースを替えて4回行う。実施後の生徒の振り返りによると、「なんとなく入ったブースが意外

生きかたゼミ



女性のライフパフォーマンスを高めるウェアブランドを展開する会社の共同代表は、幼少時からの悩みが今の事業や活動につながっていることや、みんなが「ありのまま」で生きられる社会への願いなどを語った。



トランスジェンダーの男性俳優は、「絶望は幸福への伏線である」というメッセージを生徒に送って講演を締めくくった。講演後の対話も活発で、解散後に個別に話を聞きに行く生徒も。

と楽しかった「自分には関係がないと思っていた分野に興味が湧いた」といった発見も少なくないようだ。

「担任と連携し、芽生えた意識を夏のオープンキャンパス参加につなげています。12月開催でも新たな出会いや深い体験を促し、少しずつ進路意識を高める支援をしていきます」(牧井先生)

社会と接点のある学びで「やってみたい」を深める

3つ目は、少人数ゼミ形式で社会とのつながりをリアルに学ぶ「おもゼミ」だ。各学期末の放課後、外部の専門家を講師とする1〜3回連続プログラムのゼミを開講している。まず一部のコースの希

キャリアフェス



専門学校によるテレビ番組スタッフ体験のブースでは、本物の機材を使って撮影を体験した。



専門学校によるホテルの仕事体験するブースでは、ホテルマンの方からテーブルマナーの指導を受けた。

望者向けとしてスタートしたが、今後は対象を拡大していく予定だ。

地域内のみならず府外の企業・団体・個人も講師として協力し、今年7月は11種類のゼミが開講した。地元の商店街にあるピザ店と連携し、マーケティングから新メニューの開発、商品化までを体験する「ピザゼミ」。専門職大学の教員が講師となり、実際に生成AIに触れながら、AIの可能性や活用方法を学ぶ「AIゼミ」。福岡のぬか漬け専門店を21歳で起業した店長に、ぬか漬けの魅力や起業の裏側を学ぶ「ぬか漬けゼミ」などだ。

当日のファシリテーションは外部講師に一任するが、教員も校外引率や出欠管理などの後方支援にあたっているという。

おもゼミ



現役の監督と俳優が講師を務める「映画ゼミ」。生徒自らが出演、撮影、編集まで行って短編映像を制作した。



古着に詳しい同校職員が講師を務める「古着ゼミ」。職員に古着の知識を教わりながら、実際に古着を仕入れて値づけし、文化祭で販売する計画だ。

ゼミに取り組むうちにそのテーマの面白さに目覚め、「もっと学びたい」という生徒もいる。その意欲に応え、もう一歩学びを深める「おもゼミエキスパート」に発展するゼミも出てきた。

「昨年度の中国語ゼミで参加生徒が『中国語って面白い。スピーチコンテストに出てみたい』と何気なく口にしたことを、一緒に参加していた教員がすくい上げエキスパート版としての活動を始めた。生徒たちは放課後や自主練習を重ねて中高生向けのコンテストに挑戦し、見事入賞を果たしました。一歩を踏み出すことで自分の可能性を広げる、良い経験になったのではないだろうか」(教務部・白須晴信先生)

変化と失敗を歓迎する職員室の文化へ

これらの取組は、学校法人本部が主導する学校改革のなかで生まれたものだ。同校はかつて生徒指導に苦慮していたときもあり、規律の確立と厳格な生徒指導が求められていた。その時代を支えてきた教員のなかには、「信頼と対話」を重視する学校改革への対応に戸惑いも見られたという。

そこで25年度、教員自らも既存のルールにとらわれない挑戦をしようという志による教員プロジェクトが立ち上がった。まずは教育実践の土台となる、生徒指導内規の全面改定や学校行事の抜本的な見直しなどから着手していった。

「ねらいは、職員室に変化と失敗を歓迎する文化をつくることです。職員室で先生たちが失敗を恐れずチャレンジしていれば、それがきつと教室の生徒たちにも起こるはずですよ」(馳川先生)

教員プロジェクトを通じたミドルリーダーの教員の共感力を活かした働きかけと、新しい取組で生き生きとする生徒の姿によって、教員一人ひとりが「おもしろい教育」の担い手としての意識を高めているという。

「経営層の方針を咀嚼しながら、現場でも目的や方向性を自律的に考えるフェーズに入ってきました。生徒のために『おもしろい』を追求すれば、理念から外れることはありません。先生たちの主観を大切に、目の前の生徒たちの根っこにある課題を見出し、解決するビジョンを共に描



おもゼミのキャラクターデザイン講座で生徒が制作した、「みらコレ」のマスコットキャラクター。

図「未来の種まきコレクション2026」の講座の一例

講座テーマ	果てしなく広がる宇宙は君たちの未来
講座のPR内容	君たちが知らない世界を1つ手に入れよう！そこから広がる無限の可能性はこれからの君たちの未来そのもの。知れば世界が広がり、広がれば好奇心が湧く。好奇心が湧けば、行動が伴えば目標が変わる。目標ができればやる気が出る。やる気が出れば人生が充実する。自分の「生きかた」が見えるかも！
講座の目的	● 未来を切り開くため「知らない」から「何かを知る」経験 ● 可能かどうかかわからない「夢(目標)」への挑戦の熱意を伝える ● 実際に自分たちでモノづくりを体験し、失敗も成功も体験させる ● 「おもろい」「わくわく」を糧付けさせる ● さまざまな企業の紹介 ● クラウドファンディングや株など資産形成と社会との関係
当日の流れ	5分：導入 ▶ 10分：スライド紹介 ▶ 25分：実験 ▶ 5分：振り返り ▶ 5分：質疑応答

いていきたいと考えています」(馳川先生)

**教員が外から持ち帰った
学びの種を生徒に還元**

そんな教員プロジェクトで出たアイデアが基となり、今年度新たにスタートした取組もある。「先生が学べば、生徒の世界は広がる」をコンセプトとし、教員が外の世界から「学びの種」をもち帰って、生徒が将来、花を咲かせることにつながっていくという「未来の種まきコレクション」(「みらコレ」)だ。

「世の中には、生徒たちがまだ知らない仕事や学問、価値観、学びの世界が数多く存在します。しかし、それらに生徒が

Interview

「おもろい」とは、 楽しさのなかに学びがあること

生徒募集ポスターの「おもろい」という言葉が目につき、他校にはない活動に惹かれて入学を決めました。これまで参加した活動で印象に残っているのは、「生きかたゼミ」でゲストの方の生き方がシンプルにすごいなあと感じ、「自分に正直に生きよう」と思うようになったことです。また、映像の仕事に興味があり、「おもゼミ」では映画ゼミに参加しました。実際に短い映画づくりに取り組んで、撮影技術は難しかったけれど、やってみる楽しさを知りました。中学まではあまり自分からアクティブに活動するタイプではなかったのですが、「高校では違うことをしてみよう」と一歩踏み出すようにしています。そのなかで、知らない世界に触れるのは楽しいです。「おもろい」とは、楽しいだけでなく、そのなかに学びがあることだと思います。(1年生・田中も香さん)

ポジティブに 学校生活を送るようになった

「生きかたゼミ」の俳優の方の講演では、過去に傷ついたことも率直に語られて、「自分はこんなことで傷ついていたらあかん、まだがんばれる」と前向きになりました。「キャリアフェス」ではジェルネイル体験がきっかけで、夏休みはいくつもの美容系専門学校オープンキャンパスに行き、将来についてあれこれ考えているところです。「おもゼミ」では美容ゼミに参加し、企業の商品開発の話や聞くなかで、自分でメイクをするだけでなく、好きなメイクを人に届ける仕事にも興味芽生えました。中学生のときよりも、今は学校に行くことへの意欲が高まり、さまざまなことに前向きに取り組みながら学校生活を送っています。(1年生・永田心美さん)



出会う機会は決して多くありません。教員自身が学校の外に出て新たな知見や経験に触れ、その学びを生徒に還元していきたいと考えています」(牧井先生)

全教員が3〜4人のチームとなり、大学・専門学校の最新動向や、注目の学問分野、多様な働き方など、生徒の未来の選択肢につながるテーマを設定。夏休み期間中、外部で実施されるセミナーの受講や、先進校の視察などを行った。そこで学んだことを生徒向け講座としてまとめ、9月に2学年対象行事として「みらコレ」を開催する。「地方創生」「宇宙」「株式投資に役立つ経済学」「総合大学のメリットと卒業後」「面接対策」など多様なテーマが予定されている。

「事前に生徒に告知する講座情報では担当教員の名前を伏せ、生徒が人ではなくテーマで選択できるようにしています。『みらコレ』を通じて教員と生徒の新たなつながりが生まれることも、狙いの一つです。

「ポジティブになった」 「挑戦するようになった」

学校改革の開始以降、同校の方針と取組に共感し、前向きなエネルギーを内包する生徒が多く入学しているという。最初は内に秘めた状態でも、多様な大人

す。今後、生徒が進路や探究活動で悩んだ際などに、「あの先生に相談してみよう」「あの先生の意見を聞いてみたい」と思えるような関係性への発展を期待しています」(牧井先生)

「みらコレ」の前半は、教員が講師となつて講座を展開。後半は講座を横断して生徒と教員がグループを組み、前半で学んだ内容を共有し合う。

「生徒を取り巻く進路環境が大きく変化している現代、教員自身も学び続ける姿勢をもち、生徒と共に成長しながら、『おもろい』を生み出していきたいと考えています」(牧井先生)

との関わりや体験に揉まれるなかで、「ポジティブになった」「新しいことに挑戦するようになった」と少しずつ自身を変容させているという。

「本校で自分なりの『おもろい』を見つけ、それを具体的な形で表現して人にも伝えられるようになったら、きっと豊かな人生につながるはず。生徒が自分の生き方を自分で選んで描いていけるよう、背中を押し続けたいと思います」(白須先生)

「自分は何に心が動くのか、何に疑問を感じるのか、実際にたくさん触れるなかでわかってくるものです。経験の積み重ねでその感覚を磨くことで、これから進路や生き方を自分で選択していくことになれてほしいと考えています」(馳川先生)

同校の改革は始まったばかりだ。変化と失敗を歓迎する職員室から、新たな「おもろい」展開が生まれるかもしれない。そのなかでこれから生徒がどのように成長していくか、期待が高まる。